

渋谷ラジオ #26 「あれから、これから」

その1「白鳥さんと鑑賞、PICFA 見学ツアー」第3話：あれこれ振り返り ※約30分

出演 ゲスト・白鳥建二（全盲の美術鑑賞者、写真家）、岩中可南子（アートマネージャー、編集者）、原田啓之（医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 PICFA 施設長）、進行・門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）

（ジングル：ottotto 「CLAP」）

門 みなさん、こんにちは。東京都渋谷公園通りギャラリーが配信する渋谷ラジオ「あれから、これから」の第3話です。ナビゲーターは東京都渋谷公園通りギャラリーの門 [ルビ：モン] あすかです。今回は、ピクファの施設長・原田啓之 [ルビ：ヒロユキ] さんにご案内をいただき、施設の見学を、白鳥さん、岩中さんとしました。ここからは、施設見学の後にみんなでした座談会をお聞きいただきたいと思います。

門 さて、施設見学してみていかがでしたでしょうか、岩中さん。

岩中 いやー、なんか2時間ぐらいでしたけど、すごい情報量というか、たくさんいろんな人と会って、いろんな話聞いて、いろんな作品見たので、もうすごい頭の中がたくさんいろいろな刺激と驚きと感動とで、すごい面白かったんですけど、やっぱり作品。もちろん作品の面白さみたいなのはあって、それを生で見られて、こういうふうに作品ができてるんだってという驚きとかもあったんですけど、そういう環境を、どういうふうに原田さんが作っているのかっていうお話がすごく興味深くて。一人ひとりが作業しやすいような空間を設計してたりとか、選べる、自分が落ち着いて集中できて好きなものに取り組みする空間を作っていたりとか、地域の人との出入りをうまく作っているというのが印象的で。画材を寄付してもらったり、植物をプレゼントしてもらったりとか、うまく巻き込んで、その後も継続的に関係が成り立つような、そういう場作り、環境作りみたいなのがさりげなく、でも面白くやられてて。そういう循環が、いい流れがたくさんピクファにあって、そういうもののいろんな結果として作品もあって。作品だけが前に出ているというよりも、そこにいる人たちが生き生きして、いい環境でいい空気が流れていて、そういう雰囲気ですごく感じて。みんなが面白いというのは、こういうことだったんだというのを、ほんの少しの時間だったけど、すごい実感したという感じでしたね。

原田 ありがとうございます。ありがたい。

門 白鳥さんいかがですか。

白鳥 やっぱり、場の雰囲気がすごいいいですね。多分、どこを取っても、いいんだと思う。ピクファとか、原田さんの過去のインタビューの記事とか、いくつか読んだんですけど、どこかの新聞社の記者の人が、ここに来て羨ましいと思ったみたいなことを書いてあるところがあって。これは羨ましいって思うよね。居たいところなんだよね。近所だったら、ふらっと来たいところ。俺は、きっと何もせずにいるみたいな。そんなことが平気でできそうな感じの、そういう印象ですね。

門 原田さんどうですか。

原田 お二人の聞いて、よかったなというのと、白鳥さんに関しては、視覚的に見えない中で、空気感だったり音でしか情報が入らなかったかもなんだけど、そういうふうに言っていたら、ありがたいなと。誰しものが遊びに来て楽しんで帰るっていう、そういう場所になれば、小さい子からおじいちゃんおばあちゃん、実際に障害の子を産んでしまったと思っているお母さんたちって、やっぱりまだ小さい赤ちゃんとか抱えているところのお母さんたちって、そういうふうな感情があって、別にアートに特化しているわけでもなく、福祉に実は特化はしているけど、そんなに全面的に福祉するわけでもなく、単純に遊びに来れる場所。母体が、うち病院なんですよね、こう見えて。患者さんとかも、実はたくさん来る中で、遊びに来て、受診して帰るみたいな。謎の行動が起り始めている。普通は、病院って行きたくない場所。福祉施設もどっちかっていうと、まだまだ元気吸い取られるじ

やないけど、まだね、やっぱり結構感じるでしょ。あれって、僕は現場の職員としては、すごく寂しい。当事者って多分そんなに悪くないんですよ。どっちかっていうと環境整備をしている、働いている人側に実は問題というか、あって。多動とかね、多く動いちゃうとか、人を叩いちゃう、他害をする子がいるんとか言うけど、別に叩かれても俺いいよって遊びに来る人もいますよ。うち他害の子はいないですけど、ただ、そういう人たちとの価値交換をできる場所にしたいっていうのがあった。障害があるからを言い訳にしないとかね。その人となりを見てもらって、一緒にいて、それがその人にとって難しいことであれば、そこにどう合わせてもらうかを相手側が考えてくれて。そういう場所になったら、多分何しても怒られないだろうっていう。そんな形で作っていったんで、お二人がそうやっておっしゃってくれるっていうのは非常にありがたいな。

白鳥
原田

原田さんはこの環境は、もう以前からこういうのを実践したくて設計してた？
そうなんですよ、実は。何を作りたかったかっていうと、文化を構築したかったんですよ。文化構築って、意外と企業とかいろんな福祉施設もしている。福祉施設はあまり聞かないけど、ずっと残る企業って残るじゃないですか。そういう企業さんに聞くと、うちはちゃんと文化を作っているって言うんですよ。文化って何なんですか？それ理念とは違いますよね？理念とは違う。100年、200年、300年って続くためには、理念だけじゃやっていけない。自分たちがやってきたものがちゃんと刻まれて、心に残る文化がないと会社は残らないし、繁栄はしないって結構おっしゃる方が多くて、周りの企業に。福祉施設って、いろんな話を聞くと、あの施設長がいた頃は良かったとか。意外と聞きませんか？ありがちでしょ。たぶん白鳥さんとかは絶対耳にする言葉だと思うんですよ。だから福祉が良くならないんだって思ったんですよ。だったら福祉施設こそ、やっぱり文化構築をちゃんとしていく。その次の代が、またそれを引き継ぎ、理念と文化構築をして、場所を作っていけば、あの施設長がいた頃は良かった、あの人がいてくれたらねとかにならずに、町に浸透できるなと思って。だから意図的に文化構築をやるっていうのは意外と心がけてる。

白鳥
原田

それはどれくらいの時期には考えた？
実は、僕2002年からアートを仕事にするっていうのをうたってやった施設って、実は日本で初めてだったんですよ。当時、福岡で。で、文化構築をするっていうのは、これもたぶん白鳥さんとか岩中さんもよく聞く言葉だと思うんですけど、「うちの施設は地域に根付いてます」っていう施設って、根付いてくないですか？これって喋っていいものか？けど、意外とそうなんですよね。そもそも地域に根付いてるってなんだろうって思った時に、やっぱり開放されてる。本当に来たい時に遊びに来て、来たい時に帰る。いろんな相談とか課題を障害のことじゃないことで相談をしに来る場所。うちって結構教育とか高齢者問題って結構相談に来るんですよ、なぜか。それを僕は町長に電話するんですよ。「こんなの言われてます」みたいな。言ったら、「分かった分かった、ちょっとその課に伝えとくわ」っていうので、早いものはすぐ収まるって。白鳥さんとかも特にそうだけど、自分が住んでる町の役場に、こうしてくれ、ああしてくれって言いにくくないですか？だって覚えられちゃうから。「また来たよ、白鳥さん」って。「またあんなこと言ってさ」、みたいな。そんなすぐ何かも変わらんよ。しかも健常者が多い中で視覚障害者だけに振った、なんかそういうのって作りにくいよって絶対思われるじゃないですか。ここだと言いやすいんですよ。ピクファが代弁するから。白鳥さんが言ったとか言わないからね。ってなったら、いわゆる町の課題が集まり、それを変えていける。僕、ピクファを作る時、2017年からそれを実施しようと。自分が施設長になるんで、それがやれる立場になった感じですね。勝手に僕はピクファを地域の資産にしようという名目を持って文化を構築を始めたっていう。資産になれば、みんな大事にしてくれるし、いろんなことを相談してくれるし、僕たちも勉強ができるっていう。何よりもメンバーの友達が多分増えるなって思った。そこです。

岩中

そうなんですよね。アートを特化してアートを仕事にしてるってことはもちろんやられてるけど、作ってるのはアート作品だけではなくて、それはもちろんあって、それがお仕事

になってみんなの工賃にはなってるけども、町に出かけてくきっかけになったりとか、自信を持つきっかけとかになってるけど、なんかやっぱりピクファが作ってるものは、今おっしゃってた文化というか、ここに来たら会いたい人がいて、自分が関係してるものがあるって、また通いたくなるなみたいな、そういう関係性を作っている場所なんだなっていうのが、すごい今日実感としてあって。アートがその間にあることで、メンバーさんのことを知れたりとか、アートがあるからコミュニケーションできたりとか、アートが媒介することでコミュニケーションがすごく活発になったりもしてて、アートと場作りと福祉と地域みたいなのがすごくいい感じにぐるぐるって回ってるのが、すごく気持ちよい場所だなと思って。ほんと私も近くにあったら通うだろうな。スナックとかやりたいですね。すごい、こんな場所なかなかないなって。いろいろ言ったりしてるんですけど、どことも違うというか。

原田 当事者、いわゆる知的障害、自閉症、ダウン症、精神障害とか、あと難病の人もいますけど、その人たちを主役にしたときに何をすべきかって、意外と多分考えないんですよ。どっちかっていうと組織とか、こうあるべきみたいな。特に白鳥さんと僕は同じ大学に行って福祉を学んでるんですけど、福祉って学べば学ぶほど、ガッチガチになるんですよ。こうあればならぬみたいなのがあって。こうあるべきっていうのが実際めっちゃくちゃ邪魔をする。

白鳥 要するに嫌になっちゃうんですね。

原田 本当そうですね。冒頭ちょっと話してた、視覚障害者は目が見えなくてこういう人だからとか、自閉症の人はコミュニケーションが苦手で音が苦手だからとか、特性を知ってもらうっていうのはありがたいけど、その先にある白鳥さん、原田さん、岩中さんとかっていう個性を見てもらえないっていうのは、もったいないなと思って。そこを解放した時に、彼らを理解してください、支援してくださいって思いはあるけど、それが先に立つと、苦しいじゃないですか、それ言われた方は。正義の刀振りかざして、もう断れないみたいなね。首根っこ捕まえられて、福祉をゴリ押しするみたいな。どっちかっていうと、ピクファが有名になるとかそういうことじゃなくて、加田さんとかうちのメンバーそれぞれに友達を作れば多分間違わないだろうなと。友達が困った時は友達が助けてくれるじゃないですか。意外と本人、障害者施設で利用者さんが困った時に、じゃあ地域の人がなると、ちょっとそんなに手貸してくれないんですけど、友達がってお互いになると手出すじゃないですか。友達作ればいいっていう。だからスナックを開いて、その人に焦点を当てたことをやるっていうのは、実は面白おかしくはやっちはいるけど、どっちかっていうと加田さんっていう特性、個性と障害っていう愛嬌がある特性。だったらスナックのチーママって、めっちゃ合うよね、みたいな。しかも、本人が望む、男子とめっちゃ喋りたいっていう。ただ暴走するんで、地域のおばちゃんにママに入ってもらって止めてもらいたいな。「加田さん行き過ぎ」「引いちゃう」みたいな。でも、それは友達だから言える。そこかな。

白鳥 僕も最近考えてることで、お金、社会の経済の話とか、政治とか行政とかの仕組みとか、そういう話も大事は大事なんだけど、それとは別のチャンネルで、個人の友達関係、知り合いっていう力の方が結局強いんじゃないかなっていう。今、原田さんが喋ってたようなことを僕も最近考えてまして。

門 つながりとか支える力がって言うことですか？

白鳥 そうだね。いざという時っていうか、力が必要って言った時に、結局は自分の周囲の友達知り合い関係の力の方が、よりジャストミートするっていうか、いい感じに働くんじゃないかなっていう。行政、難しいんですよ。

原田 だと思います。ヘルパーさんとかね、障害の子たちが、どこかご飯を食べに行きたいって、ヘルパーさんをお願いして行くって、それなりに結構楽しむんだけど、これがその子のファンの友達、加田さんに500本の色鉛筆をくれた人とご飯を食べに行ったら、絶対、加田さん、もっと楽しいだろうなとか。だったら、やっぱり友達作って。うち、ピクファ

って、前の施設とか通常の施設は絶対 NG なんだけど、ピクファで知り合った人とドライブ行ったりとか、飲み行ったりは、うち全然 OK なんです。通常の施設だと止めると思います。

白鳥
原田

そうなんだよね。

ただ、その当事者と友達になってくれた人の理解、繋がりとか、あと白鳥さんは IQ 的には正常であるから、発達障害の子が、いわゆる 20 何歳で女性で小学生ぐらいしかいないってなった時に、一人のジャッジはちょっと厳しいんで、そこに必ず親を入れて、親と本人と友達で話し合いをしてもらおう。うち、ありがたいことにイベントの時に親も結構来るんですよ。それは楽しみに来る。我が子を抱えるんじゃなく、自分の子がスナックやってる様子とか、あと、どんな友達増えただろう？みたいな。「あんなおしゃれな人と話しちゅうけど、原田さん、あれ誰？」「アパレルのスーツブランドの人で、最近仲いいんですよ。」「私、ちょっと話してみたい」みたいな。自分の子どもは置いといて、接してくれてる人と話したい。だって、親だったら絶対嬉しいと思う。実は今度、ランチ一緒に食べたいと思ってるんですけど、ぜひ行ってくださいって言える。本人、親、それから行ってくれる人と、ピクファがコンセンサス取れば、一応オッケーにしてるので。今日撮影で今村さんという方は、前のうちの施設のメンバーと屋台に飲みに行ってくれたり。

白鳥
岩中・門

へー。

すごい。

原田

いつも写真をね、作品の写真も実は撮ってくれてる方なんで、「撮ってるから、最初のビールはおごれよ」みたいな。

門

だいぶフランクですね。

原田

その後の料理は全部実は、全部今村さんが支払ってくれるんだけど、「一杯目はおごれよ」みたいな。それって楽しいじゃないですか。

門

コミュニケーション。

原田

で、やっぱり発達障害で、お金の理解がない人も、「じゃあ俺がおごる」って、いくら払うかも分かってないからね。お金の価値が分かってないからね。ただやっぱ、俺がおごったって言えるって、強いじゃないですか、やっぱり気持ち的にね。無理に友達作れっていうことではないんだけど、馬があう人に、やっぱり絶対一人じゃ、僕も生きられないと思うんですよ。誰かの何かを借りなければならぬ。だったら、近しい人がいてくれば、もうそれこそ、白鳥さんもそうだろうけど、深夜に来てくれるとかね。本当に困った時に、っていうのは大体、夜中とか朝で、本当に緊迫した場面。それが行政あいてない時間帯とか。絶対そうなるじゃないですか。

門

役割がね、違うんでしょうね。できることも違うし、求めることも違う。

原田

やっぱ、デンマークとかはね、そういう時間帯でも来てくれるし、もうダウン症の 2 人のカップルがね、バーでお酒飲んで。実際に子育てしてる人が向こうにいるんで、いろんな話聞くけど。で、バーにデートで行って飲んで、お金が足りなかったら連絡してくれ、っていうのをバーテンに知らせとけば、「足りませんでした」「やっぱりね」っていう連絡があるっていう。行った箇所の人はもうみんな友達みたいな、そういう目線で扱ってくれる社会があるっていうのは、強いなっていうのは、日本はやっぱりそこまでまだ行けないから。そうするとね、白鳥さんがいつか杖振り回しながら歩ける時が来る。

門

それはまた別の話になるけど。

原田

かっこいい!! みたいな。それをみんなで笑いながら肩組んで歩ける、気の許せる人がいて。

白鳥

今度やる関係のアート展。あれもいいですよ。

原田

ありがとうございます。これも佐賀県の事業なんで、それをいわゆる障害者アート展って言われるものを、佐賀県はやりたいと。10 何年前にやって、結局、人が全然入らなかったりとか。「そうだ、今日障害者の絵を見に行こう」なんて、まだ僕ちょっと時代が早いと思う、はっきり言えば。プラス、障害のある人たちの絵を集めて展覧会をする時に、じゃ

あ、どういう目線で人が来るのかっていうのは、ちゃんと見ておかないと、知っておかないといけないなど。佐賀県からは動員数を上げたいと。そうしないと、なかなか事業の継続がしにくい。予算もつけにくいっていう名の下、実は始まったんですよ。最初言われたのは、障害者作品展か、アール・ブリュット展みたいな形でやりたい。その名前です。もしその名前で行くんだったら、僕は一生関わりませんっていうのを県にはっきり言って。で、え？ってなって。だって、そこで、そういう目線でタイトルつけられると、やっぱり行きにくくなるから、僕がタイトル考えていいですか？っていう展覧会のって言ったら、最初ちょっと、うーんってなって。最終的につけたのが、「関係するアート展」。関係するアートみたいな名前にしたんですよ。これは、実は、意味わからないんですよ。関係するアートって。実は関係するって、どんな関係の仕方でもいいですよっていう。当事者が障害の子たちの作品を集めるけども、白鳥さんが今日関係してくれたんで、たとえば、白鳥さんの写真、ちょっとうちの展覧会、関係するアート展に出してほしいってタイトルにした。

岩中
原田

そこも関係するんですね。

門さんが何か今日喋ったことを、その関係するアート展で出したいんだけど。それは関係してるんで、障害も健常も関係ないっていう意味合いでつけたんですよ。去年から健常者の作品も一緒に展示してるんですよ。実は4回目です。でも僕は前の施設から健常者の作品と一緒に、最初から実は展示してるんですよ。それで波風起こったこともないし、それこそ関係してる人、うち家具メーカーさんとかもつながってたりするんで、展覧会会場に毎回ソファ借りるんですよ。三脚、三セットとかね。それは自閉症の子たちが見に来たときに、小さい子たちってまだ走り回るんですよ。お母さんたちって走り回るの、走んなさんな、そっち行ったらダメ、それ触っちゃダメってずっと言わないといけないから、見れないんです、作品。ただソファ1個置いとくだけで、その上で寝転がってゲームしたりとか。もう爆睡してるとか。運用のために実はソファ置いてるんですよ。で、それソファは寝転がると分かるんですけど、眩しくないようにライト全部つけてないです。ソファの上には。それはいわゆるカームダウン的なものもあるんですけど、どっちかっていうと、見る人がリラックス。あとは騒ぐ人はそこでゆっくりとかね。できるような照明とかにしてるから、関係する人たちが、家具屋さんも関係してるんで、家具貸してくれるし、お金を出资するっていう関係する人もいれば、っていう人もいるんで、関係すれば何でもOK。関係するアート展。

白鳥
岩中
原田

今年は10月？

10月ですね。10月18日から11月30日までって書いてあるよね。すごい面白い。ナイトミュージアムセッション。一夜限りのDJとアートが即興で奏で合うイベント。

そう、今回10月18日に佐賀最高フェスって言って、博物館の前にある結構広いところに1万5千人くらい集まる野外フェスやってるんですよ。2日間、18、19。それは今度10回目です。関係するアート展は実は4年間の事業で、もう終わりだったんですけど、県知事があれは無くしちゃいけないっていうので、継続ってなって5回目ができるようになったんです。どっちも記念で開始が一緒だから、同じ課がやってるんで、文化課が。だから、音楽の要素を展覧会に入れ込みたいっていう話が出て、美術の、彼らの展示してる250点くらい、全国から集めた障害のある方の作品の中に、実はDJブース作って、佐賀出身のDJを呼んで、DJをかけながら、県知事と本田さんがライブペイントをする。

岩中
原田

県知事もペイントするんですか？

僕、いつも展覧会の時にテープカットをするって言われるけど、もう1回もしてないです、僕。もう嫌で、それも。テープカットをするのって、なんか俺、意味なくない？みたいな。

岩中
原田

いい、いい。

だったら、ライブペイントに県知事が参加して一緒に描くとかで、今から始まりますにした方がいいっていうので、実はもう5回目、県知事とライブペイントを一緒にする。今

回、ちょっとDJが入るんで、県知事と本田さんが20分だけ一緒にライブペイントして、その後、60分DJイベントの時に本田さんが、それをまた上書きして描くんで、多分、無限に知事の絵全部消すだろうなって。

岩中
原田

それもいいですね。忖度せずに。

もうこうあるべきなんてない。県知事、山口さんは、ピクファのこと大好きで、ピクファにも来てたりとかね。展覧会も来たり。公務と言いつつ、ほぼ全部見に来てくれたりとかね。ありがたいことに、去年僕、佐賀県の文化賞をいただいたんですよ。しかもアートの部門で。福祉部門じゃなくて。しかもその時、40代だったんですけど、40代で文化賞ってほぼ前例ないんですよ。だいたい70、80の人たちがもらうような賞を実はもらった。本当に粹なことをしてくださったんだけど、それぐらいコンセンサスが取れてて、理解してるんで、「本田さんならいいでしょう」みたいなね。やろうやろう、みたいな。ちょっとタブーかもしれないけど、その爆音じゃなくてね。DJの方にもこういう作品が来てて、障害の子たちも見に来てる可能性があるから、会場の雰囲気を見ながら即興でやる。本田さんが即興で描くっていうのを今回取り入れる。結構ね、斬新かな？冒涇なのかアートなのかちょっとわからないけど。関係してたから、しょうがないみたいな。

門

狙ったのか、思わずなのか、わからないんですけど、いろんな方向に繋がっていくっていう。今回もいろいろ、大学出身が同じだったりとか思わぬところで。

原田
門

びっくりした。

ありがとうございました。以上でピクファ見学の旅は終わりたいと思います。今回は会話による美術鑑賞ではなく、会話による施設見学でしたが、いかがでしたでしょうか。最後に皆さま、東京都渋谷公園通りギャラリーの展覧会にお越しの際は、ぜひ会話による美術鑑賞を実践してみてください。ありがとうございました。

(ジングル：ottotto「CLAP」)

おわり